

幼児の発声と歌唱表現における音楽指導法
～頭声発声とピアノの両輪～

野 秋 未 紗
四條畷学園短期大学

Music Method Of Children's Vocalization And Singing Expression
～ Appropriate Singing Method And The Importance Piano Accompaniment ～

Misa Noaki
Shijonawate Gakuen Junior College

四條畷学園短期大学紀要 第50号 別刷
平成29年12月25日

幼児の発声と歌唱表現における音楽指導法 ～頭声発声とピアノの両輪～

野 秋 未 紗*

Music Method Of Children's Vocalization And Singing Expression ～ Appropriate Singing Method And The Importance Piano Accompaniment ～

Misa Noaki

1. はじめに

音楽活動の中で「歌」は、低年齢から高齢者まで幅広い層の人に愛される表現活動である。ダニエル・J・レヴィティンは、「歌」を語る 神経科学から見た音楽・脳・思考・文化で“文字のない社会はあっても音楽のない社会はない！”¹⁾ と言っている。更に、歌と心理学や音楽と医療など、音楽と人間は、切っても切れない関係にあると唱える研究者も少なくない。

スポーツ選手の多くが集中する際に好きな音楽を聴くと言ったインタビュー記事をよく見かけるし、音楽祭や卒園式の際に披露された演奏で涙が出ましたといった声もよく聞く。

音楽とは、人類が生きるためのエネルギーと言えるのだ。

幼児が笑顔で楽しく歌う姿は、誰が見ても幸せな気持ちにさせるし、幼児が伝えようとするメッセージがダイレクトに伝わってくる。幼児教育は、歌で始まり、歌で終わる。朝、幼児たちが教室に入り、はじめにすることは歌であいさつだ。元気に歌い笑顔で歌う。その姿を教員は見て、その幼児の今日の様子や調子を観察するのである。帰り際もさよならの歌を歌う。その時も、一日の幼児の様子を思い返しながらかい、明日も元気に会おうねと歌うのだ。幼児教育の中での音楽活動は、幼児期を生きる子どものありのままの姿を表現させることができると言っても過言ではない。

音楽をはじめる者は、必ずクラシック音楽を体

験する。現代の日本において耳にする音楽は西洋音楽を源流とするものがほとんどであるからだ。クラシックで用いる楽器は、ピアノやフルート、ヴァイオリンなど多くの楽器が挙げられるが、歌も体を用いた楽器の一つとして発展してきた。地声や胸声が強いまま歌うのではなく、『頭声』を用いた発声法で歌うのがより良い方法である。頭声とは、声種の一つである。この頭声がクラシック音楽で用いられる要因として、美しい響きと幅広い表現力、音域の広さではないだろうか。頭声発声は、「歌う」活動において、身に付けておきたい音楽活動と言える。幼児教育を学ぶ学生に対しても、幼児に対しても頭声発声の必要性の理解と技術を身に付けてもらいたい。

更に、幼児教育では、ピアノ技術は身に付けなければいけない力である。ピアノが弾け、弾き歌いができる教員がいるというのが、幼児教育を行う上で、必要不可欠であるためだ。

2. 頭声発声

近年の幼児教育の現場では、元気に楽しく大きな声で歌わそうとするあまり、地声が強くなっている。これは、幼児の小さな声帯に悪く、音域もせまくなり、歌唱の表現にも悪い影響を与えている音楽活動と言えよう。

頭声発声は、細く弱い声で歌うことから、幼児期の声帯において、無理のない自然な声が出せ、高音域が出しやすくなる。そのため、幅広い歌唱表現ができるようになる声の出し方と言える。

そこで本学では次のように指導している。

* 四條畷学園短期大学 非常勤講師

(1) 発声練習曲

「かえるの合唱」は、移調唱でイメージをもって歌うことにより、低い音から高い音まで自然にスムーズに出せるようになる。譜例1のように、ヘ長調がお母さんがえる。ト長調がお姉さんがえる。イ長調がお父さんがえる。ト長調の声のイメージを持ったまま、低い音域を歌うことにより頭声と胸声のつながりがスムーズになり、正しい音程で歌える。お父さんがえるより1オクターブ高いイ長調が赤ちゃんがえるといったイメージを持って歌うことによって、イ音から二点嬰へ音が比較的スムーズに出せるようになる。

低い音域、高い音域ばかりでなく、色んな音域を平等に練習することが大切であり、どの音域も細く弱い声にしなければならない。

幼児は、自然に歌うと地声で音程のない声になりがちである。そのため、まず、指導者は自ら歌唱し、見本となる発声と歌唱の方法を聞かせる。繰り返される指導者の歌唱をまねすることで、幼児は、次第に発声の仕方「耳」で聞いて体で覚え始める。さらに、「優しいお母さんがえるで歌ってみよう。」や「きれいなお姉さんがえるで歌おうね。」といった、幼児がイメージしやすい例をあげながら指導することで、歌唱表現が定まり、頭声発声が身に付くようになる。

高い音をパッと歌える子とすぐに歌えない子がいるが、無理に出させるのではなく、息の流れの中で出せるようにする。

正しい音程で歌えるようにすることは大切だが、幼児の発達段階に合わせてしなければならない。最終的にはできるようになるので、長い目を持って根気よく指導することが大切である。

(2) 実際の童謡指導

旋律模唱により、簡単な旋律を「トントントン」等のことばで旋律をピアノで弾きながら歌い模唱する。少しずつ音程を広げていき、音名で模唱し、慣れてきたらリズムにも変化を加え、音の数も増やしていく。次第に幼児はピアノの音を聞き音名を歌えるようになる。旋律模唱をすることにより、音感が身に付いていき、幼児期に音感訓練を受けることで絶対音感が身に付けられる。

「こぶたぬきつねこ」山本直純作詞・作曲や「やまびこごっこ」おうちやすゆき作詞・若月明人作

曲の曲を用いて、指導者が先に歌い、幼児が声をまねして頭声で歌えるようになる。

「かぜさんだって」サトウハチロー補作・芝山かおる作詞・中田喜直作曲、「とんびのうた」近江靖子作詞・湯山昭作曲などは、頭声になりやすい曲である。

「おながへるうた」阪田寛夫作詞・大中恩作曲、「おふろじゃぶじゃぶ」さとうよしみ作詞・服部公一作曲などの、付点が続く曲、低い音程の曲、マーチ曲などは、地声になりやすい。但し頭声を学んだ後に、その曲を歌うと、地声になることなく、音程も正しく頭声発声のできた歌声になる。

更に、カノンを体で身に付けさせることで、頭声発声のできた幅広い合唱ができるようになっていくのである。

(3) 合唱への導入

『カノン』は合唱するための導入曲として用いている。同じ旋律を少し遅れて入っていくことにより、他者の声と自分の声を聞き、ハーモニーを体感させる。正しい音程、音高感を持つての歌唱ができていないと楽音としての響きが至らない為、ハーモニーを体感することはできない。

ただし、幼児にとってカノンをするのは難しい。カノンの導入として、言葉や動きなどの模倣や模倣の連続、言葉の模倣のみでは理解しにくいので、身体的な動きを加えると効果的である。さらに発展させてリズム打ちを加える。

必ず一定の速度で行い、2拍子3拍子4拍子と拍子を変えてカノンに発展させていく。このことを「体のカノン」と呼んでいる。

「体のカノン」を行う上で、比較的、2拍子を取することはスムーズにできる。しかし、幼児の大きな壁になっているのは、3拍子4拍子と拍子が増えるに連れて、頭で理解することが難しく、拍子感が待てなくなる。拍子が増えるに連れて拍子感が取れない幼児には、2拍子に戻り、できるようになれば、3拍子4拍子と拍子を変え、次第にできるようになっていく。

歌唱でのカノンの曲をする際、斉唱で何度も繰り返し歌い、正しい音程で歌えるようになってから、カノンにして歌うようにしている。まずは、幼児が先に歌い、教員は、幼児の歌う部分をピアノで弾きながら追いかけるようにしている。次に、

順序を逆にして、練習を繰り返すことで、最終的には、幼児同士でカノンができるようになるのである。

こういったカノンを使った練習を重ねることで、合唱指導がスムーズにいき、きれいなハーモニー合唱の道筋となっている。

3. 幼児教育とピアノ技術

将来幼児の教育に携わろうとする者において、ピアノ技術は必要不可欠なものである。

学生の多くが、ピアノの未経験者であり、その学生たちをたった1年で弾き歌いの技術とバイエル終了までの技術を身に付けさせなければいけない。弾き歌いの技術に求められる力とは、両手で演奏しながら、歌と一緒に歌えるということである。テンポ感、歌詞の大切さ、声かけなど合図を行いながら、曲のイメージを大切に、幼児が歌いやすいように先導しなければいけない。

ピアノを弾きこなすには、日々の練習が不可欠である。そのため、学生が自ら自主性を持ち、練習に取り組めるよう、指導に当たっている。

「1年間で弾けるようになる」という目標がある。しかし、個々の学生によって、技術面や精神面など様々である。そのため、個々にあったカリキュラム・マネジメントを学生と共に相談しながら決めている。

また、自主性を育むために、自ら計画する力も指導している。将来、幼児教育に携わる者として、見通しを持って物事を計画していく力は重要である。その為、ピアノのレッスンを通して、自分を自ら見つめ、マネジメントできるようにさせたい。

日々のピアノ練習をするには、練習ができる環境を整えておくことが必要である。その為に、本学では自主的に練習ができるように練習室を開放している。そうすることによって、家に楽器がない学生や時間の確保が難しい生活を強いられている学生にも授業の合間に練習する事ができる。

また、授業時間外の相談や補講なども行っている。気兼ねなく分からないことが聞けたり、困っていることを手助けしたりすることで、ピアノ未経験者の心身の不安を解消し、自らの意欲向上へと繋がっている。

レッスンの目的は、教則本と弾き歌いができるようになる事である。その為に、曲が楽譜通りに

弾けているか、弾き歌いの時のテンポ設定や歌詞の大切さ、曲のイメージなどが考えられて出来ているかなどを指導している。

音楽の授業では先生役と幼児役に分かれ、お互いの弾き合いや歌い合いをさせ伴奏が止まらないで最後まで弾けるか、どうしたら幼児役が歌いやすいように弾けるかを考えながら日々の反復練習により経験を蓄積させている。

4. おわりに

頭声発声にしろ、ピアノの技術にしろ、出来るようになれば楽しいものである。また新たな経験や、やり遂げた達成感を繰り返し経験すれば、生きることへの充実感が生まれ、それがまた幼児教育者になると思える意欲にも繋がる。よいスパイラルが回り始めると学生生活にもよい風は吹き始めるものである。

(1) これからの自らの課題

養成校の学生の指導において、保育者を目指すという将来の夢をより一層高め、幼児教育の高い能力を身に付けさせることが必要である。ピアノ未経験者の、ピアノ技能向上に向けた指導には、ただ単に読譜力や技能だけを指導すればよいという訳ではない。学生の年齢期には、人間関係が希薄化し、同年齢間の悩みや他者との比較。さらに、夢への戸惑いなどが生じてくることも多々ある。その時に、ピアノ授業を担当する者との2人の時間が教育相談の時間になることもある。学生の思いを受け止め、共感し、教員自らの経験等を含めた助言が学生の夢や希望に役立てることも多く、学生がありのままの気持ちを素直に打ち明けられるような関係性を築けるように努めている。

しかし近頃、良く感じることもある。私が教員になったばかりの頃の学生は、幼児教育者になるため、熱心に学業に励み、意欲的に様々な教育活動に参加していた。しかし、近年の学生を見てみると、学業よりもアルバイトが優先で、教員の方から背中を押さないと課題に取り組めない学生も出てきた。時代の変化と言ってみればそうかもしれないが、近年の教育に対する風当たりも厳しくなる中、このような学生をこちらが背中を押して課題に向かわせる指導を続けていていいのかどうか、疑問である。

自らの課題に対して、責任を持って取り組み、最後までやり抜こうという姿勢。多様な人間関係との調和を取りながら責務をはたす資質は、教育者のみならず、社会人に必要なスキルである。そういった社会人としての在り方を含め、自ら主体的に夢を追いかけて、学び続ける学生を育てるにはどうすればよいかを、念頭に日頃から模索し、教育活動が続けていかなければいけないと考えている。

(2) 望ましい教育者

幼児の成長を見守り、未来の展望を広げる基礎・基本の基盤作りをする教育者を育てなければいけない。

『花』を例に挙げると、きれいで個性的な花を咲かせるには、それを支える根が豊かでないと咲かない。きれいな花を育てるための、水や肥料、土、日光などを教育に例えるならば、親や教育者は、それらを指すことになる。花によっては、水をやり過ぎてはいけないものもあるし、肥料を与え過ぎてはいけないものもある。土や日光なども同じことが言える。教育をするとは、担当教員含め、学生を支える周囲の者とのバランスが必要であり、どのような人がどのような愛情を持って接していくかが大切である。時には厳しく、時には包み込むような教育をしてこそ、美しく綺麗に咲く花のような人間となりうるのであり、周りから認められ、頼りにされる人間となるのである。

幼児教育を指導する者として、厳しくも優しくもある教員であり、模範となる人間となることが何よりも大切なかもしれない。

添付資料

譜例 1

第7講 指導上の留意事項(一)

109

かえるの合唱

岡本 敏明 作曲
ドイツ 曲

引用文献・参考文献

- 1) ダニエル・J・レヴィティン (2010) 『「歌」を語る 神経科学から見た音楽・脳・思考・文化』 スペースシャワーネットワーク
- 2) 東保著 岸井勇雄 大久保稔 編 (1984) 『音楽 (音楽リズム)』 第7講 P.107～P.130 チャイルド本社
- 3) 東保著 岸井勇雄 大久保稔 編 (1984) 『音楽 (音楽リズム)』 第8講 P.136～P.142 チャイルド本社

－ 2017. 10. 25 受稿、2017. 10. 31 受理 －

